

2. II 黒層遺物とその遺構について

萩ケ岡 1、2 式期の遺構：図 X-1-②に縄文時代中期前半Ⅲ群 a 類期の住居と土壌を示した。本文中で示したとおり、H-4、P-1、P-19、P-32について、それぞれの時期を決定する遺物中に共通する土器がある。従ってこれらを遺構のセットとして捉える事ができる。共通する土器とは、図 1 に拓影で示した土器 a₁ (図 VI-35-1) と土器 a₂ (図 VI-35-10)、土器 b (図 VIII-23-2) のうち 2 ないしは 1 種類である。a₁ と a₂ はいずれも径 2mm ほどの半截竹管による連続した押し引きを隆帯に施し、胎土と焼成についてよく似る。別個体だが、同一時期の土器と判断した。また a₁ と a₂、b は包含層からも出土している。その出土位置について遺構配置図に示した。a₁ と a₂ を 'a'、土器 b を 'b' として表した。すると 4 つの遺構に囲まれた台地上平坦部に分布が集中することがわかる。焼土の集中 A [F-32、40、47、48、50] (Ⅵ章-4 参照) や図 VIII-37 に示した包含層出土石核の分布もほぼ合致する。当時、住居の南側に焼土が広がり、3 基の土壌を利用したことが伺える。台地平坦面には小型の円形土壌 P-6、7、13 が分布する。本調査区内では定形的な遺構である。先の 4 遺構と時期的に同一かどうか遺物上からは判断できない。さらに、東側の一段低位な段丘面の II 黒層焼土群付近に土器 a の出土がある。関連して、太矢印で示した位置から北海道式石冠 (縄文時代円筒土器文化特有の遺物) が出土している事を付記する。以上、同一時期の空間利用モデルとして提示する。

萩ケ岡式土器：今回、萩ケ岡 1、2 式が出土した縄文土器の主体である。この土器群を特定の期間を表す遺物群として認識する。編年上後続する萩ケ岡 3 式 (天神山式) の土器片はなかった。そこで、対比のために萩ケ岡 1、2 式、萩ケ岡 3 式、萩ケ岡 4 式について、当遺跡から比較的近くに位置するユカンボシ E 7 遺跡、キウス 5 遺跡 C 地区の遺構に伴う土器をそれぞれにあてはめた (①)。一般に、萩ケ岡 3 式を構成する器種をみると、波状口縁の頂部を棒状に造り出し、地文は斜行縄文の器が目立つ。胴部のふくらみが強くなり、口縁部には明瞭な肥厚帯を造り付ける。半截竹管施文について、竹管の端部で粘土紐の側縁辺を器に押しつけ、そのまま粘土紐上を直線的に引くという操作を連続した『刺突 A (Ⅷ章-3 参照)』に類する刺突と、隆帯とは無関係に、竹管により器表面を直に押引いて加飾する、という 2 種類の装飾方法が普遍的となる。萩ケ岡 4 式 (柏木川式) については、頸部に屈曲部分を持ち、突起様の波頂部はあるものの平口縁といってよい深鉢が目立つ。3 式段階においても、ウに示した様な平口縁深鉢はあるが、器形としてより確立する。ところで今回出土のⅢ群 a 類土器について、円筒上層式 b、c 式の影響が強い撚糸圧痕文を隆帯上に連続して施す個体や、上層式そのものについて確定できる物 (①-A) はない。③は、北海道の天塩山地、日高山脈より西の地域において、萩ケ岡 1、2 式に併行する土器とその直前直後の土器を並べたものである。道南を中心とした沿岸部には、円筒上層 b 式から系譜がある弧線文モチーフを、細い隆帯や沈線で器面に施す土器が分布する。三角形の波状口縁を持ち、胴部がゆるく膨らむ。口縁部文様帯に大木 8 式起源の渦巻き文様をあしらう榎林式に類した個体もある。それに対して石狩低地帯を分布の中心とする土器群は、胴部上半に直線構成の文様を施す。隆帯上連続刺突について施文具は多様である。今回出土の 1、2 式について、隆帯上 'く' の字形連続施文の方法に、棒状工具と半截竹管、2 種類の施文方法があり、相関的である。3 式期の半截竹管施文の緒源が伺える。1、2 式は器面調整を終えてから隆帯もしくは沈線加飾をする。調整として器内面をよく磨き、縄文施文によって器面を整える。隆帯の剥落したものについて裏面をみると、縄文地文の凸型が転写されているものがある。器面調整を先に施すため、粘土紐貼付けの直前には器表面が乾いていたことがわかる。この時期の遺物について焼成時の隆帯剥落は多い。隆帯上に施された連続刺突や短沈線の役割として、粘土紐の剥落防止もあると思われる。

『刺突 A』には、それがよく表れていると考える。

(大泰司統)

①：ユカンボシC15遺跡①地区周辺縄文時代中期中葉の土器変遷

②：遺物 $S = 1/6$

